



# 「都会と田舎をつなぐ」を考える

特定非営利活動法人・地球緑化センター 熊崎 惣太

## 都会の若者の「田舎観」

近年、都会から田舎に向かう人々の動きは活況を呈している。田舎へ憧れる人々といえ、かつては悠々自適な老後や第二の人生を過ごしたいという熟年層がそのイメージにぴたりだった。近年はそうでもない。大学生やビジネスパーソンなど、第二の人生どころかこれから本格的に第一の人生を送ろうとしている人たちがその渦中にある。かつてだったら、そういう若者はカウンスター・カルチャーの真ん中にいるような人たちだったかもしれないが、今やごく普通の若者がそつなのである。

裏の畑で採れたトマト



▶人々を惹きつける囲炉裏の炎

が食卓に上る、薪を燃料に料理をして暖をとる、谷から水を引いて飲み水にする…こんな暮らしが、これから第一の人生を送ろうとしている人たちに「おもしろそう」「そんな暮らしもいつかはしてもいいかも」と

いう感覚で捉えられ、実践するかどうかは別として、そんな話題で盛り上がる時代だ。

思い返してみると、こうした変化を自分の実体験でも感じる。岐阜県の萩原町で生まれ育った僕は大学進学とともに上京した。林業や農業を生業にしてきた実家は、僕が子供のころ、バブル景気の真っ只中に、新風呂、囲炉裏、汲み取り便所は当たり前で、毎食四世代がそろって食事をするような家だった。そんな田舎から上京したのころは、出身地を明かすのをなんだか恥ずかしく思ったこともある。ところが今はといえば、この誌面で思いきり田舎っぴりを披露できるくらいに、そんな暮らしをしてきたこ

とを面白おかしく話せるようになっていく。それをまた興味を持って聞く人達も東京にもたくさんいる。さらに、緑のふるさと協力隊や地域おこし協力隊のような制度を活用して、実際に田舎に暮らしながら地域活動に従事する人も着実に増加しているし、ファーマーズマーケットなどのように、地方の産物を都会で販売するような機会もたくさん見つけることができる。そして皆それを楽し



▶親子連れなどにぎわう都心で開催される農産物のマーケット



## 情 報

しんでいる。

上京するまでは都会と田舎はまったく別の世界、切り離されたものなんだと思っていたが、こうした人々の変化が、決してそうではないということを思わせる。また、次のような日常のことも、田舎と都会の連続した関係性を意識させる。

## 意識されない現実

子供のころ、春の訪れとともに山から勢いよく流れてくる水が水田に注ぎ、苗が気持ち良さそうに浸るのを見て、なんとも言えない清々しさと豊かさを感じたものだった。ところが今は、家の脇を流れる小川の水は減り、田んぼに張る水も遠いところからホースで引いてくるようになった。そればかりか地域を流れる飛騨川の水位も下がって、夏になると競うように飛び込んだ岩場には子供の姿はもう見られない。東京湾に注がれる多摩川や利根川も、そのような小さな水の流れが無数に集まっていることを考えると、東京の河川敷でバーベキューができるのを楽しんでばかりはいられないような気もしてくる。「そのうち、東京に供給する水がなくなるんじゃないか？」こんなことまで思ってしまう。

また、東京駅に程近い我々の事務所

所周辺には、お昼ともなると屋台の弁当屋さんが現れる。メインのおかずと、副菜が3種、別容器のご飯と味噌汁が付いて500円。30代の僕でもお腹いっぱいになる。僕は「デフレ弁当」と呼んで時々購入するのだが、反面、バーベキューと同じようにありがたがってばかりはいられないように思う。弁当の中身をたどって行き着く農業の現場を思うと、この価格で農業を続けていくことができるのかと不安を覚える。

この認識が正しいかどうかは議論の余地はあるだろうが、この水道でもひねれば当たり前に水がでたり、500円で満足できる弁当を食べられたりする都会の日常と、田舎の現状は無縁ではないはずだ。農水産物や水などの供給源として都会は田舎の恩恵を受けているし、田舎も都会の経済活動がなければ文化的で便利な暮らしはできないだろう。都会と田舎は、我々の日常の生活に大きな影響を与える太くて長いライフレインで繋がっている。ところが、あまりにも当たり前すぎるのか、特に都市部でこれを意識する場面はほとんどない。しかし、このライフラインが分断されれば都市生活は大打撃を受けることは間違いないだろう。農村部にしても今の暮らしが維持できるか分からない。電気・ガス・

水道のように資金を投入すれば作れるかといえば、そんな単純な話でもないし、目に見えない分、分断されたり破損したりすると修復するのは困難だ。

だとすれば、今の暮らしを維持しより豊かで発展的な都市生活や田舎暮らしを実現するためには、同じライオン上にある互いの存在をきちんと認識し、相互に活用できる関係性が不可欠だと思う。

## 都会と田舎の間に立つ意味

確かに、別の地域に住む人たちや社会のことを、当事者意識で捉えるのは難しい。けれども徐々にではあるが、田舎の話に関心をもつ人が都市にも増えてきたという紛れもない事実と下地が既にあるし、外部人材を活用する地方自治体も増えている。都市を川の下流、田舎を上流に例えるならば、下流の人たちが上流の

方になんとなく目を向け始めた今、どのタイミングでどれくらいの水を流すのか、目や言葉で合図を交わしながら呼吸を合わせる時代になってきていると思う。

というのも、村おこし町おこしは数年来言われ続けてきて、たくさん事例がすでにある。ところが今だ



▶ 今後の活躍が期待される緑のふるさと協力隊

## 情 報

「豊かな自然」とか「おいしい野菜」という類の宣伝文句の域をなかなか脱することができていないようにも思う。昔はそれでも良かったのかも知れないが、今の時代の人にはそれだけでは魅力としては伝わらない。

そこで、田舎と都市の双方から示されるサインを相手方が魅力的に認識できる表現に変換し、互いの動き

が相乗効果を生み出すように中継ぎするのが、まさに我々のような活動をしている団体や、農山漁村に赴く「緑のふるさと協力隊」や「地域おこし協力隊」などの若者なのだと思う。

さらに言えば、中継役がいなくても阿吽の呼吸で互いの意図が交わされる関係性、言い換えれば日頃の暮らしの中にお互いの存在が自然に混ざり合っている社会を目指す過程に、新しい「田舎×都市」の可能性を見出すことができそうだ。

携帯電話がない時代のことを思い出してみたい。「手のひらサイズの通信機器で電話もゲームもできて、写真なんかもとれます」などと言っても誰もその必要性を感じなかったはずだ。しかし一度社会に溶け込んでしまえば、それに伴う新しいサービスやモノも生み出され一大産業として成長した。携帯電話は、その概念や意味さえ持たなかった我々のライフスタイルに、それが

なければいけない新しい社会と市場を作り出した。

固定電話より通話料の高い携帯電話を使うように、少しくらい高価でも手間暇かけて育てられた野菜をたまには食べたりにすることが、意識と無意識の間のあたりで市民の中に浸透したらどうだろう。携帯電話産業と同じようにとまでは言わないでも、これまでにないビジネスや暮らし方が開発され、様々な可能性を見出すチャンスに遭遇できるのではないだろうか。

## 時代をつなぐ

ここで言いたいのは、「これから田舎を活用した大きなビジネスを」ということではなく、自分にとって意味や価値のあることを、他人にとっても同じように感じてもらえるようにする過程にこそ、新たなチャンスを得る発端があるのではないかということだ。そのためには双方の資源やネタを発掘するアンテナを張り巡らすことが必要だし、それをどんなふうに関わり合わせるかクリエイティブな力量も試される。簡単にはできないかもしれないが、田舎に飛び込んだ若者たちは、都会と田舎の両方の現実を知っているという強みがある。彼らの気づきや視点には、

コンサルティング会社や研究機関でも得ることのできないリアルで有効な情報に溢れている。材料はそろっている。これからはそれらをどう活かしていくかにチャレンジすることこそが我々に与えられた役割で、そこに果敢にトライすることに大きな意味がある。

黄金色の稲穂が揺れる秋の景色や、蛍が飛びよる初夏の夜、燃えるような紅葉…日本人のDNAに組み込まれているかのように懐かしさを感じたり夢線に触れたりするような豊かな自然や四季の移ろいは何物にも代えられない。一方で、否応なしに時代は進化する。だからこそ、古き良きものを懐かしんだり、失われたことを嘆いたりするだけではなく、何百年と受け継がれてきた心の在りようをどうやって新しい時代とリンクするか積極的に考えていくことにワクワクしたいと僕は思う。

今や、それができる時代になったのだ。都市と田舎の間に立った我々は、単に場所と場所をつないでいるのではない。時代と時代の狭間にたっているのだ。過去と現在を未来につなげ、新たな時代を作り出す最先端にいますのだと考えている。これを大きなチャンスと捉えて、場所や時代を包みこむ創造力豊かな未来を目指したい。



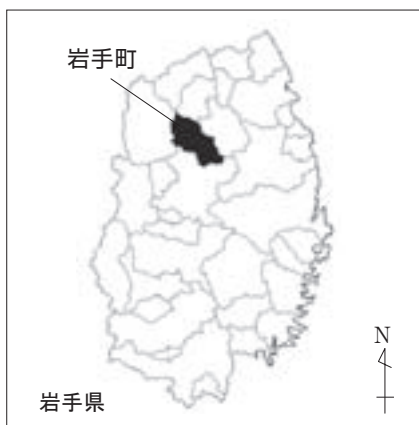
▶緑のふるさと協力隊の報告会。都会の若者は田舎をどう捉えたか



## フォーラム

## 豊かな自然に包まれた町

岩手町は、岩手県の中中部から北部に位置する、人口約1万5千人の町です。人間が健康的で文化的な生活を営む上で最も適しているといわれる北緯40度線上に位置し、県都盛岡市の中心部からは北へ30キロ。国道4号と東北新幹線、IGRいわて銀河鉄道が南北に貫



## 現地レポート

## 地域資源を活かした活性化策

**岩手町が誇る文化的な  
風土と豊かな食材**  
～芸術と野菜総合産地の発信拠点・  
道の駅「石神の丘」～

き、町の交通体系の主軸を形成しています。また、東部には国道281号が陸中海岸へ連結。西部には主要地方道岩手平舘線、県道岩手大更線が八幡平市へと続き、東北自動車道西根IC、松尾八幡平ICへ連結するなど、鉄道・自動車両面で高速交通網の利便性が高く、県の北部における重要な交通ネットワークを形成しています。

町の総面積360・55kmのうち、約76%が山林・原野となっており、緑と広い空を感じられる豊かな自然に包まれています。地勢は、南東から北西にほぼひし型に広がり、東部を走る北上山地は全般に複雑で東西に高く、西北に低い様相をなしています。西部には盆地状の一方井地区があり、北部と西部ではその地形の違いから異なった趣を見せています。



いわて まち  
岩手県 岩手町

△緑と広い空を感じられる豊かな自然の中にある「石神の丘美術館」

## フォーラム

## 『石神の丘美術館』の誕生

岩手町には、早くから芸術の情熱を醸成する文化的風土がみなぎっていた。昭和32年、故齋藤忠誠氏を中心に岩手町在住者を主体とした美術集団「エコール・ド・エヌ」が結成。岩手町から盛岡、東京、韓国、パリなどにも発表の場を広げるなど充実した活動が行われていました。

昭和48年からは町特産の黒御影石を主材に「岩手町国際石彫シンポジウム」を開催し、世界各国から石彫作家を迎えました。作家たちは約2カ月間にわたり町内に滞在し、ワークシヨップなどで町民と交流を深めながら作品を制作。制作された作品は町に寄贈され、町役場庁舎前の石彫公園や町内の公共施設などに設置されました。その作品数は130点を超え、「彫刻によるまちづくり」の礎になっています。

人々の心に語りかけるような作品を制作する作家たちの情熱と、その志を支える町民。そのような文化の薫り高いまちづくりが背景になって、平成5年に野外彫刻美術館「石神の丘美術館」が誕生しました。石神山の緩やかな傾斜に開かれた美術館を歩けば、季節を追って咲く山野草が笑顔を見せ、自然の中でさまざまな彫刻がやさしく語りかけてきます。

## 地域の風が行き交う美術館

平成14年7月には、美術館に隣接する道の駅「石神の丘」が完成しました。これを機に美術館も常設展や企画展ができるギャラリーと創作活動を体験できる工房などを整備しリニューアル。全国的にも珍しい、道の駅併設の美術館として生まれ変わりました。

リニューアル後の美術館は、「質の高い芸術文化の発信拠点」、「町民が美術に親しむ場」をテーマに、博物館、資料館としての役割も担うなど幅広く活動を展開。岩手町出身の作家や岩手県にゆかりの作家の展覧会を開くとともに、岩手町埋蔵文化財展、町の小中学生や高校生の作品展を毎年開催するほか、コンサートやワークシヨップなどを開き、美術に限らず音楽など広い芸術領域に触れられる機会を創出しています。

より地域に根差し芸術文化を発信する美術館を町民も一体になって盛り立てます。美術館のサポーター「石神の丘美術館友の会」は、屋外展示場の清掃や植栽などをボランティアで実施。また、町内の茶道愛好者が野点の会を開くなど、石神の丘美術館は、地域の風が行き交う美術館として、豊かな未来づくりの拠点になっています。

芸術との出会いを  
予感させる  
「アートロード」

平成14年12月には、東北新幹線盛岡―八戸間が開通。本町のいわて沼宮内駅―東京駅が最短で3時間弱で結ばれるようになりました。

このいわて沼宮内駅から「石神の丘美術館」までの歩道などには、彫刻や休憩用のベンチなどを配した「アートロード」が整備され、道行く人々の癒しの空間となっています。

## アートロードの石彫作品



②作品名「名犬シナモン」

岩手町をロケ地として撮影された福祉映画「ホーム・スイートホーム」に出演する「シナモン」がモデル



③作品名「ニホンカモシカ」

自然豊かな町内に多数生息する「ニホンカモシカ」は、眼下の「北上川」の悠久の流れを見つめ、石の上にたたずんでいます



①作品名「ウォーター・マーク」

雄大な北上川の流れを表現する岩手町のシンボルモニュメントは、アートロードの起点として人々を迎えます

## フォーラム



△道の駅「石神の丘」は、産直施設、レストラン、農産加工施設などを備えるほか、併設する「石神の丘美術館」との相乗効果で、連日多くのお客様でにぎわいます

いわて沿宮内駅に降り立ち、駅前広場に出ると真っ先に目に飛び込んでくるのが高さ8mの石彫「ウォーター・マーク」です。岩手町を源泉とする東北一の大河・北上川。その北上川の四季を石柱の四面に表現し、石柱を取り囲む二つの壁は、奥羽山脈と北上高地を象徴しています。豊かな山々から自然の恩恵を一身に集めて太平洋に注ぐ、北上川の雄大なスケールと千変万化する水の表情を表現した作品です。

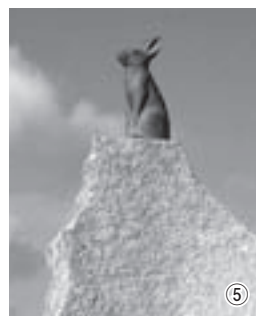
岩手町のシンボルモニュメントとして堂々とそびえ立ち、駅に降りた人々を迎えています。  
このウォーター・マークを起点に、石神の丘まで約800mの道のりにたずむ動物たちの彫刻は、美術館までの道しるべになるとともに、人々をアートの世界へいざない、素晴らしい芸術との出会いを予感させてくれます。

美術館に隣接する道の駅「石神の丘」

は、平成14年7月24日にオープンし、昨年10周年を迎えました。青森から東京を縦貫する東北の大動脈・国道4号に直結する同駅は、駐車場や道路休憩施設としての役割はもちろんのこと、岩手町の物産観光を発信する拠点として大きな役割を果たしています。美術館との相乗効果もあり、町内外からの来場者数は、開業以来10年で420万人を超えました。

同駅の産地直売施設に入ると、自然光が差し込む明るい店内に、色とりどりの農畜産物が並んでいます。これらはすべてが岩手町産です。町の主要産業である農業では、町内の畜産農家と耕種農家が連携して堆肥などを循環活用し、地域内の資源の活用と環境に優しい農業を実現する「耕蓄連携」を推進。特産キャベツ「いわて春みどり」を筆頭に、レタス、ホウレンソウ、ピーマン、ダイコン、ナガイモなどが栽培面積県内トップクラスを誇り、岩手町は全国有数の「野菜総合産地」としてPRしています。産直施設の利用者は、今朝畑で収穫された新鮮な野菜類が所せましと並び店内に、野菜総合産地・岩手町の姿を感じることができるでしょう。

これら豊かな町産食材は同駅のレストランと農産加工施設の「茶屋っこ」で味わうことができます。地産地消2つ星の「レストラン石神の丘」では、季節ごとに変わるコース料理をはじめ、「春みどりラーメン」や「石神長いもそば」、「ブルーベリーカレー」など、町の特産品を使用した特色ある多彩なメニューを提供します。一方「茶屋っこ」では、農産加工組合員が真心を込めて手作りした、懐かしい母の味と手打ちの十割そばが人気。「ご当地ソフクリーム「春みどりソフト」はここだけの限定品です。また、産直施設、レストラン、農産物加工施設が三方を囲む中央の広場では各種イベントが開かれ、町内外の人と人が交流する場所になっています。



④作品名「いわてレッドデータブック」  
岩手県内に生息する希少な野生生物のリスト「いわてレッドデータブック」から、ほ乳類26種を石の引き出しにしまっています  
⑤作品名「トウホクノウサギ」  
伸び上って遠くを探るような仕草が愛らしい「ノウサギ」は石神の丘美術館入口付近で訪問者を歓迎します



## フォーラム

道の駅「石神の丘」は、岩手町の情報発信と交流の拠点。岩手町に来たらずい、お立ち寄りください。

### さらなる発信を目指す 『ドライ野菜パウダー』

産直施設や地産地消のレストランなどを通じて、野菜総合産地・岩手町を発信し、町の農業振興につなげようと取り組む道の駅「石神の丘」。その取り組みの一つに、「農家応援プロジェクト商品」があります。

商品は、キャベツ焼酎「キャベ酎」、「石神長いもそば」、「ブルーベリーカレー」、「ブルーベリーリキュール」「石神の恋ごころ」の4つ。いずれも岩手町産の原料を使用した石神の丘のオリジナル商品です。このうちの「キャベ



▷石神の丘オリジナル商品は、岩手町の農産物を原料に使用した「農家応援プロジェクト商品」です



酎」は、道の駅「石神の丘」が10周年を迎えた昨年、プレミアム版を限定発売しました。「北緯40度のまち」にちなみ、アルコール分を40%にしたプレミアム版キャベ酎は、その名も「甘藍酎」。「甘藍」とはキャベツの和名です。キャベツ産地として100年の歴史があり、かつて南部甘藍というブランドのキャベツを擁し、日本の産地として栄えた岩手町の歴史がパッケージに表現されています。

さらに、昨年から「ドライ野菜パウダー」による「当地商品開発プロジェクト」が動き出しました。このプロジェクトは、岩手町産野菜をドライ加工し、野菜パウダーを製造して付加価値を高め、レストランのメニューや農産加工品に活用して彩り豊かな「当地商品を開発しようとするものです。」「生産」

「加工」、「流通販売」の機能をすべて備える道の駅「石神の丘」ならではの六次産業化の取り組みとして大きな期待が寄せられています。これにより野菜総合産地・岩手町のさらなる発信を目指します。



△▷野菜の付加価値を高める「ドライ野菜パウダー」。彩り豊かな当地商品を開発しようとさまざまな試作品が作られるなど、4月の市販化へ向け準備が進められています



現在、ドライ野菜パウダーは4月の市販化に向けて準備中。併せて「当地商品の試作も重ねられており、新たな岩手町名物誕生の予感が漂っています。

企画商工課 佐藤 亘



情 報

町村週報主要索引

〔平成24年10月～平成25年3月〕  
2815号～2834号

〈論 説〉

- 第二のふるさとへ 感謝を込めて フ  
リアナウンサー 青山 佳世 2819 (3)  
道州制基本法案と小規模市町村の存亡  
東京大学名誉教授 大森 彌 2820 (2)  
つましやかなユートピアを夢見て  
ジャーナリスト 松本 克夫 2824 (3)

〈活 動〉

- 政府税制調査会に白石副会長が出席―平  
成25年度税制改正に際し、地方税の充実・  
確保を訴える― 2819 (2)  
安倍内閣総理大臣等を訪問―平成24年度  
補正・25年度予算について要請―地方  
六団体 2825 (2)  
国と地方の協議の場に藤原会長が出席―  
「経済対策」―平成25年度予算編成及び地  
財対策―について協議 2826 (2)  
平成25年度政府予算編成で要請活動―全  
国町村会 2826 (4)  
総務大臣・地方六団体会合に藤原会長が  
出席―地方公務員給与の取扱いについて  
議論―地方六団体 2827 (2)  
第30次地方制度調査会総会が開催―「基  
礎自治体の担うべき役割や行政体制のあ  
り方」について藤原会長が発言― 2831 (2)  
社会保障制度改革国民会議のヒアリング  
に藤原会長と渡邊行政委員会副委員長が  
出席 2832 (2)

〈政 策〉

- 南海トラフの巨大地震による津波高・浸  
水域等(第二次報告)及び被害想定(第  
一次報告)について  
内閣府政策統括官(防災担当) 付参事官  
(調査・企画担当) 付 2815 (2)  
交付税は1:5%減の17・2兆円―スタ  
ーライン、厳しく―2013年度総務省  
予算概算要求重点施策 2816 (2)  
一般会計、初の30兆円突破―生活・雇用  
ライフ成長戦略を推進―2013年度厚  
生労働省予算概算要 2817 (2)  
再生エネ、農山漁村活性化に重点―13年度  
概算要求は6・6%増―2013年度農  
林水産省予算概算要求重点施策 2818 (2)  
1年間で50事業が廃止 指定管理者制度  
導入は707事業に―地方公営企業の抜  
本改革等の取組状況― 2822 (2)  
過疎対策の現状と課題  
総務省地域力創造グループ過疎対策室企  
画係長 福島 浩 2823 (2)  
木材利用の拡大について  
林野庁林政部木材産業課長 洲上 和之  
2825 (4)  
大規模大地震、複雑多様化する災害を踏  
まえ更なる消防防災体制の強化へ―平成  
24年版消防白書 2826 (6)  
13年度当初、92・6兆円に―12年度補正  
は13・1兆円―政府の緊急経済対策、予  
算編成― 2827 (4)  
総務大臣・地方六団体代表者意見交換に  
藤原会長が出席―平成25年度地方財政対

策を受けて共同声明を発表―

- 2828 (2)  
都道府県町村会正副会長交流会を開催―  
自治功労者50名を表彰― 2828 (4)

- 地域の元氣臨時交付金(地域経済活性化・  
雇用創出臨時交付金)の概要について  
内閣府地域活性化推進室 原山 幸一郎 2829 (2)  
小型家電リサイクル法について  
環境省大臣官房 廃棄物・リサイクル対  
策部 企画課 リサイクル推進室 2831 (3)

- 農山漁村地域に関する都市住民アンケ  
ー結果が公表―交流拡大を通じた持続可  
能な集落づくりを推進― 2832 (3)  
鳥獣被害防止対策の強化に向けて  
農林水産省 生産局 農産部 農業環境  
対策課 鳥獣災害対策室 課長補佐(鳥  
獣被害対策調査技術班) 角張 徹 2833 (2)

〈随 想〉

- 協働の村づくりで、次の世代へ  
鳥取県町村会長 鳥取県日吉津村長  
石 操 2815 (11)  
わが町を次の世代に引き継ぐために  
熊本県玉東町長 前田 移津行 2816 (11)  
首都東京のオアシスを目指し  
東京都町村会長 東京都奥多摩町長  
河村 文夫 2817 (12)  
無限を拓く  
岩手県岩手町長 民部田 幾夫 2818 (11)  
原子力発電所がある風景  
新潟県刈羽村長 品田 宏夫 2819 (11)  
エルトゥールル号(先人の偉業を後世に  
伝える為に)

和歌山県串本町長

- 田嶋 勝正 2822 (12)

ふるさとに活力と笑顔を

- 福島県町村会長 福島県西郷村長  
佐藤 正博 2823 (11)

「小国寡民」で、いいじゃないか

茨城県東海村長

- 村上 達也 2824 (12)

「なくさみ」文化について

- 鹿児島県伊仙町長 大久保 明 2825 (12)

ひかり・みどり・ゆとり・協働のまち

- 愛川 神奈川県愛川町長 山田 登美夫 2826 (16)

自律から自立へ

- 三重県朝日町長 田代 兼二朗 2827 (12)

「餅」

- 宮城県色麻町長 伊藤 拓哉 2828 (15)

聖地に魅せられて

- 香川県町村会長 香川県土庄町長 岡田 好平 2829 (10)

かけがえのない人たち

- 福岡県桂川町長 井上 利一 2831 (11)

ひとにやさしく、自然にやさしく、未来

- につなぐまちづくり  
静岡県南伊豆町長 鈴木 史鶴哉 2832 (11)

『人と自然が輝く高原のまち』をめざして

- 広島県神石高原町長 牧野 雄光 2833 (11)

私が子供だった頃と利根川

- 群馬県玉村町長 貴井 孝道 2834 (11)

「フォーラム」

- 「真冬のたなばた」及び「光り輝くまち

## 情 報

- 「づくり」事業 国富町21世紀まちづくり  
フォーラム まちづくりの希望の光として  
輝く冬のイルミネーションの取り組み  
Ⅱ宮崎県国富町 2815 (7)  
ナンバーワンよりオンリーワンをみんな  
で作る「むら」づくり  
Ⅱ山形県鮎川村 2816 (5)  
産業創造と活力創出「みさとカレッジ」  
Ⅱ島根県美郷町 2817 (5)  
地域特有の自然資源（自然エネルギー）  
を活用したまちづくり「エコのまち」  
「元気活力あふれる産業のまち」を目指  
して  
Ⅱ長野県山ノ内町 2818 (6)  
災害を切り口とした地域間交流と地域お  
こし「智頭町「疎開」保険」  
Ⅱ鳥取県智頭町 2819 (6)  
旧山陽道宿場町 矢掛町 ブランド化と  
地域活性  
Ⅱ岡山県矢掛町 2820 (5)  
「心のふるさと」絵本の里づくり「人・夢・  
大地」やさしさ奏でる絵本の里けんがち  
の25年  
Ⅱ北海道釧路町 2822 (5)  
子育てしやすいまちづくり子育てを心  
援する人がたくさん暮らすまち  
Ⅱ大阪府熊取町 2823 (6)  
産業体験型観光によるまちづくり来  
なっせ やきものと自然あふれる波佐見  
へ  
Ⅱ長崎県波佐見町 2824 (6)  
ヘルスツーリズムの推進と地域振興  
「ひと・森・癒し安芸太田」森林セラピー  
のまち  
Ⅱ広島県安芸太田町 2825 (7)  
有田川町 地域交流センター「ALEC」  
本のあるカフェ+まんが館+ミュージアム博  
物館  
Ⅱ和歌山県有田川町 2826 (9)  
二宮ブランドで産業振興と農業再生に向  
けたオリーブ栽培への取り組み  
Ⅱ神奈川県二宮町 2827 (7)  
水を守り森林を育む利根川源流の町と関  
東の水瓶を自負して  
Ⅱ群馬県みなかみ町 2829 (5)  
イナカの良さ、強さ、美しさを活かした  
まちづくり「定住化施策と低炭素型ス  
マートコミュニティ構想の推進」  
Ⅱ宮城県色麻町 2831 (6)  
笠置ファン獲得へ！全国「当地鍋フェ  
スタ」の取組み  
Ⅱ京都府笠置町 2832 (6)  
多可町の魅力「まち・ひと・もの」を大  
発信！「FBI良品TAKA」と「お見  
合い大作戦」  
Ⅱ兵庫県多可町 2833 (6)  
岩手町が誇る文化的な風土と豊かな食  
材と芸術と野菜総合産地の発信拠点・道  
の駅「石神の丘」  
Ⅱ岩手県岩手町 2834 (5)  
平成24年度市町村長及び市町村議会議長  
総務大臣表彰式挙行される  
農山村で教えてもらったこと……特定  
非営利活動法人・地球緑化センター 中  
莖 優子 2828 (9)  
「都会と田舎をつなぐ」を考える……特  
定非営利活動法人・地球緑化センター  
熊崎 惣太 2834 (2)  
新任都道府県町村会長の略歴……2833  
復興だより 2817、2820、28  
22、2826、2828、2832  
町村Nav i 2815、2816、2  
817、2818、2819、2820、  
2822、2823、2824、282  
6、2827、2828、2829、2  
831、2832、2833、2834  
町村週報主要索引（平成24年10月～平成  
25年3月） 2834 (9)

## 町村専用ページ「町村.com」をご覧ください

● <http://www.zck.or.jp/choson/> ●

全国町村会では、全国の町村との連携を密にし、町村長と町村職員のみなさんの情報収集の利便性を向上させるため、町村専用ページ「町村.com」を開設しています。

「町村.com」では、全国町村会の活動状況や中央省庁などの政策情報を随時ご提供しているほか、全国の町村の先進的な取り組み事例をはじめ、各種統計資料など様々なデータも公表しています。

私どもは、「町村.com」が町村関係者にとって真に役立つホームページとなることを目指し、これからも充実をはかっていきたいと考えていますので、ご覧になったご感想・ご意見を、下記のメールアドレスにお寄せください。

[kouhou@zck.or.jp](mailto:kouhou@zck.or.jp)

・「町村.com」は、町村関係者の方だけがご利用いただける専用ページです。

・ご覧になる際は、所定のパスワードが必要になります。

・ユーザー名とパスワードは、各町村にお知らせ済み（平成18年9月27日付）ですが、お問い合わせは、全国町村会広報部までメール（[kouhou@zck.or.jp](mailto:kouhou@zck.or.jp)）でお願いいたします。





## 随 想

## 私が子供だった頃と利根川



群馬県玉村町長 貫井 孝道

我 玉村町は、利根川・烏川と2大河川が町の中を流れています。ですから私達子供は、ごく自然にこの河川によって育てられました。

玉村町の子供達にとって、この2大河川は自分たちの庭の一部でどう関わり、どう生きてきたかが私たちの歴史でもあります。

私は2大河川の一つ利根川のすぐ近くで生まれ、そして育ちました。利根川とともに育ったと言っても過言ではありません。

この私と利根川との関わりを振り返り、子供のときの生活を語ってみたいと思います。

私にとって利根川の河原は、自分の庭でありました。

冬の日曜日の朝、いつも遊んでいる近所の子供達6、7名が集まって来ます。前日の夕方、ガキ大将の「いちゃんから「明日は弁当を持って集合」と言われ、ポケットに餅を入れて集まって

きたのです。いちゃんが皆に向かって「餅持ってきたか」と聞きます。皆「ウン」と言って頷きます。これが我々の日常語なのです。

「じゃあ行くぞ」といちゃんを先頭に2列縦隊となって、利根川に向かって500m位歩きます。我々の胸の内は、利根川での遊びの期待でワクワクしています。

河原に到着すると、2手に分かれ、木の枝を使って小さい木刀を作ります。そしてチャンバラです。お互いの陣地の取り合いをします。

昼頃になると腹が減ってきます。ガキ大将の「いちゃん」が「昼飯にしよつ」と言います。

皆は2手に分かれて遊んでいたのをやめ、一緒に昼飯の準備です。

まず枯れ木を集めて火をつけ餅を焼くのです。なかなかうまく焼くことが出来ません。黒焦げや生の餅だったり大変です。

しかし誰も不満を言うでなく食べてしまいます。大勢で食べるという事と、腹が減っているためです。そして水分は河原の清水が湧いている所へ移動し、皆が並んで首を出して水を飲む、この姿がとても滑稽です。

午後3時頃になると、そろそろ陽が落ちてくるのであまり寒くない内に、又、隊列を組んで帰路に着きます。冬の日曜日の一日が終わります。

川岸に張っていた薄い氷が解け初めました。春がもう間近です。

山の雪解け水を受け、利根川の水量が日毎に増加していきます。

我々子供達は河原の枯れ草を焼きまです。これが又、とても面白い遊びです。特に寒い日は体がとても温かくなり、火遊びの面白さもあつて皆熱中します。

枯れ草の燃え跡に新緑の芽が伸びてきます。

春を感じる心が思わず弾んでくる瞬間です。

子供達は心うきうき張り切ります。なすな、つくし、タンポポ等、これらの野草を手にとって家に帰ります。各々が家で飼っている動物（ウサギ・ヤギなど）の餌にします。

ウサギを大きくし、売ります。それが小遣いになります。

出来るだけ高値で売ること、我々

の小遣いが多くなるわけです。

4月に入り桜の咲く頃、河原の樹木は新緑に染まってきます。

山の雪解け水で増水し、川幅が徐々に広がってきます。

いちゃんを先頭に子供達は、裸足になってズボンをまくり、水の中に入り小魚（ハヨ、鮎、ギユギユッタ）を追いかけますが簡単には捕まりません。魚の方が水の中では動きが良いのです。

冷たい水の中では短時間で足が痛くなり、岸に飛び上がります。

そして、足をさすって暖めます。

一日一日暖かくなる春の日は次の日曜日が楽しみです。

朝、いちゃんを先頭にいつものメンバーが集まります。前日「いちゃんから、あすは弁当持ってくるように」と話があったので、皆、ポケットの中にむすび3個程度を忍ばせています。各々の服のポケットは丸く膨らんでいます。

いつもの様に河原に到着。雪解け水のため、川幅がとても広くなっていて、水の流れの速さもいつもと違います。

向う岸にも5、6名の子供の姿があります。顔は、はつきりわかりませんが同じ年齢位の小学生だと思います。

誰か一人が向う岸に向かって石を投げました。すると向う岸からもこちらに向かって石が投げられます。しかし

## 随 想

川幅がある為、届くことはありません。川の中程の流れの中に「ドボン」と音を立てて落ちてしまいます。

絶対に相手に当たる事はないのです。

石の投げ合いが始まります。罵声を上げて相手をのしり合います。

お互いに疲れが出た頃、自然に終了となり、向い合った岸から少し離れます。

この様に、この時期、向う側に子供がいると必ずこの状態になります。別に向う岸の人たちが憎い訳でも嫌いな訳でもない、なんと言っか一つの挨拶みたいなもののなのです。

昼時腹が減ってきたので弁当を食べるときがきました。皆の顔に満面の笑みが広がります。円くなって座り、一斉にむすびをむさばります。

3個位簡単に食べます。おかずは沢庵か梅干です。でもとってもうまい。これがとても不思議でした。

その後、私が高校・社会人野球選手として活躍出来たのは、この頃の石の投げ合いで肩が強くなって、体が投げる術を覚えたのが原因のように思います。

夏の利根川の河原が一年の内でも最も賑わうシーズンとなります。

河原が玉村町の海水浴場の様に変貌します。学校も夏休みに入ります。

この時期、12時から午後3時頃まで町中から、この河原へ水遊びにやって来ます。

もちろん我々も昼飯を食べた後に毎日のように河原に集まります。

私達は利根川を対岸へ泳いで渡るというハードルがあります。

いつの日かきつと、その時期を待っています。

平均的には小学校3年生の頃がその時期です。これを成し遂げると一人前のスイマーと認められます。

私も3年生の時そのチャンスがめぐって来ました。前日から緊張です。当日はなんともいえない気持ちで河原へ行きます。

周りの人達はもう経験済みですから、平常心です。その人達に混ざって対岸へ向かって泳ぎます。

川幅は、かなり広いのですが、もしもの時はその人達が助けてくれるのです。スタートしました。私は懸命に手足をばたつかせ流れに乗り、顔を水中に沈め岸に向かって泳ぎました。何分後かわかりませんが(多分7〜8分程度)顔を上げて岸に着きました。この瞬間の感動は今でもおぼろげに、よみがえります。こうして私達は利根川を征服した感激に浸ります。

利根川は賑わいますが、夏は農家の仕事に忙しく、手伝いが大変です。水

遊びの後の手伝いは体がだるくなり非常に苦痛でした。

蚕の桑積み、牛馬のための草刈が私達子供の仕事です。仕事が終わし、長い夏の一日が終ります。

夏の水泳のシーズンは終わろうとしています。そろそろ秋です。

利根川が静かになってきました。又、利根川の河原が自分たちの元に戻ってきたという気持ちになります。

子供達だけで河原で思いっきり遊ぶのだと誰もが思っていました。

この時期台風が近づいてきます。台風は風と雨と暑い空気を南から届けてくれます。強い雨により利根川は増水し、急流となります。

この急流の川の流れが弱いところで泳ぐのがとても面白いのです。

なぜかという、魚たちも流れの弱い岸の近くに集まって来る訳ですから子供達と魚たちがこの川で一緒に泳ぐことになります。

鯰・鰻・ギョギョッタ等沢山の魚が集まってきます。

この魚達が泳いでいる私達の腹に当たります。なんともいえない不思議な気持ちになります。

多分魚たちも同じ仲間と思って安心して泳いでいるのです。

もちろん私達も魚達と友達です。普段から利根川で遊んでいるからであ

り、子供心に、この地域の利根川と、いつも一体である証だと思っていました。

利根川に育てられた私達、元気に大人になりました。

この川に教えられたことは沢山あります。その一つは、自然の中で感じる空気の移ろい、自分を大切にすると同時に、他人やいろいろのものを大切にすると言うことでした。

私が子供の頃は、大人は仕事が忙しく、子供は元気に野山を飛び回って遊んでいた時代でした。

台風の来ている急流の川で泳いだり、野焼きをしたり、今でしたら大変な事です。まだ河原の近くに家等なく田畑は手入れが行き届いていた時代だから野焼きも許されていたのかもしれない。

現在、利根川の土手はサイクリング道路が整備され、サイクリングや散歩を沢山の人が楽しんでいます。

私も時間のある限り散歩して季節の移り変わりを楽しんでいる一人です。

玉村町の素晴らしい自然や文化を、子供や孫達に引き継いでいくこと、いじめ問題、自殺、不登校等、子供達を取り巻く環境は日々厳しくなっている今日、私達大人が、どのように子供達を守っていくか、町長として、真正面から取り組んでいく覚悟です。